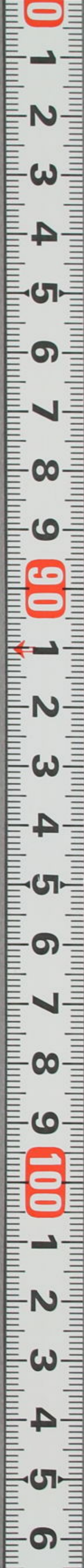




^13
3948
2



繪本三國妖婦傳下編卷之二

目録

安倍泰親祈禱城後を弔玉藻亦帝於城去

泰親が書函白れ鼓へ使くる圖

清涼殿に泰親祈禱幕目代後を弔玉藻亦帝於城去

玉藻亦祈の檀に廻く圖

門 へ13
號 3948
卷 2

玉藻前野干と化して元玄圖

恭親恩賞状賜ふ圖

狛波野の原に近陽る女次郎千将

八郎宗重の家に青蛇幣拾ふ圖

宗重が須野に千将の圖

繪本三國妖婦傳下編卷之二

安倍恭親祈禱を極めて玉藻の前帝都を去る

播磨守安倍の恭親に對して閉門の身ありといふも主上は猶ほ
休令なむと公を辟き不遇致すも加茂の神の神勅を蒙り
あまのやぐて妻の毒害小廻すや姉妹先國白忠宮との館へ
流し余黨あり筋めて目通成るい書翰を以てトとけり
恭親は忠誠なれ下とくくは智恵あり情を盡して
も國家の爲小昼飯を蒙り清惱平愈あんと成
祓けいなる如年以る信も加茂明神より不思議乃
祓勅ありて水行禱の修法を授けり事々々々の如牙



恭親^{きょうしん}の^が
妻^{つま}
関白^{かんぱく}の^の
館^{たて}
使^{つか}の^の
図^ず



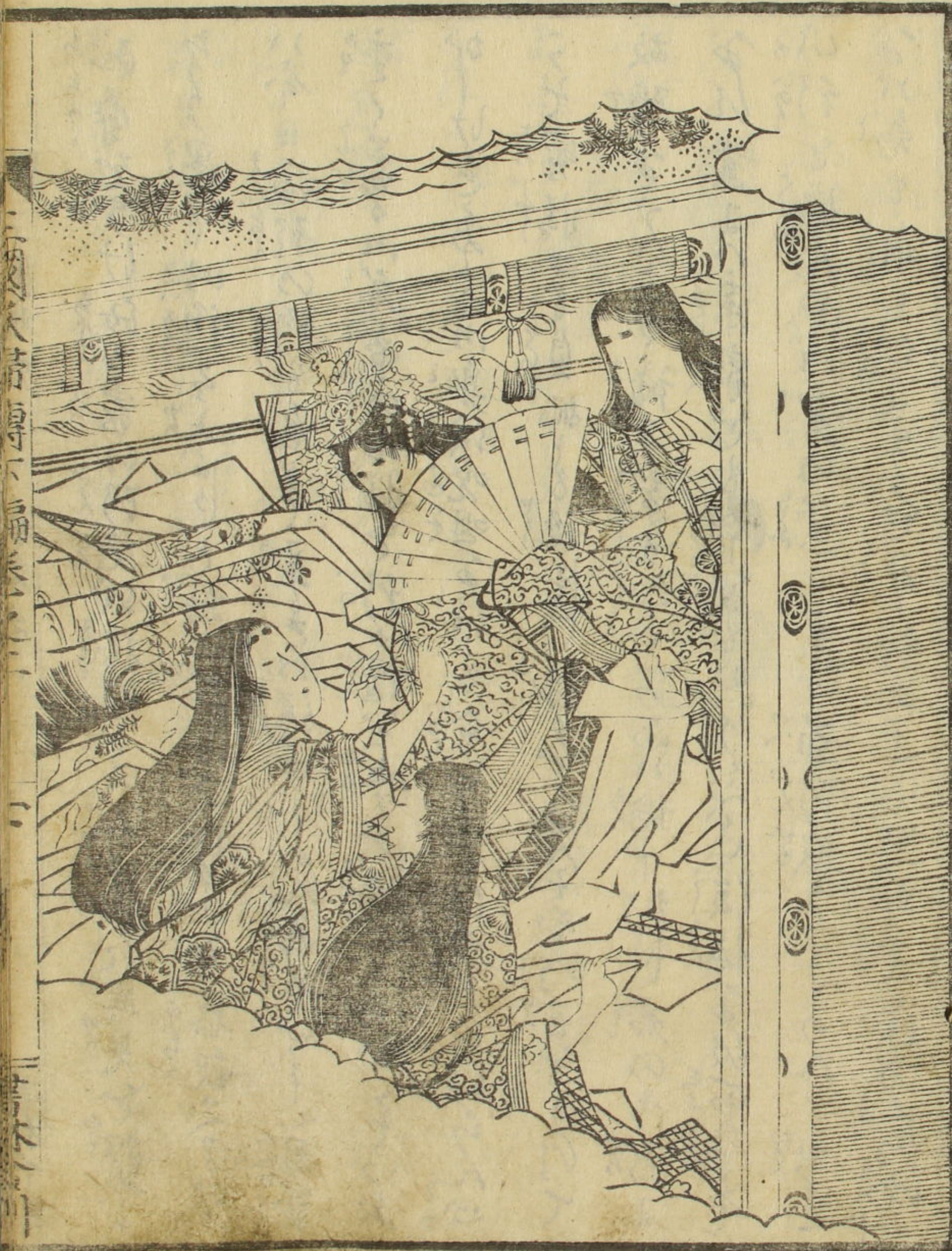
ありとほむふやと自家におもく法を修せんと思ふに
得るに一日の間に信を勅免わけて法源殿に檀を構
新なるに法源平金穀あふむべからずと
奏同を授けし勅許の詔命にふんずるやひきき
とに慈恵の如く思ふに國白殿下讀終るに
恭親忠義の如く我知るにふも能くくくく
國は遠せんといふに願堂一にいけふふを法源殿にけり
恭親とびるに法源殿の如く願堂の如く主上にお
あむといふに法源殿の如く願堂の如く主上にお
玉藻の如く法源殿の如く願堂の如く主上にお

あるに法源殿の如く願堂の如く主上にお
法源殿の如く願堂の如く主上にお
國白殿下（め）て遠せんといふに法源殿の如く願堂の如く主上にお
身を法源殿の如く願堂の如く主上にお
護持の如く願堂の如く主上にお
北をよみ取其中央は小丘と小丘に勅許一日月星の三光
天七十二府神抱卦童子至卦郎の座二十八宿をておに
うて青龍朱雀白虎玄武の四神を建東は角亢氐房心
尾箕北は斗牛女虚危室壁西は奎婁胃昂畢觜參
南は井鬼柳星張翼轸を列一日月歳星熒惑星太白

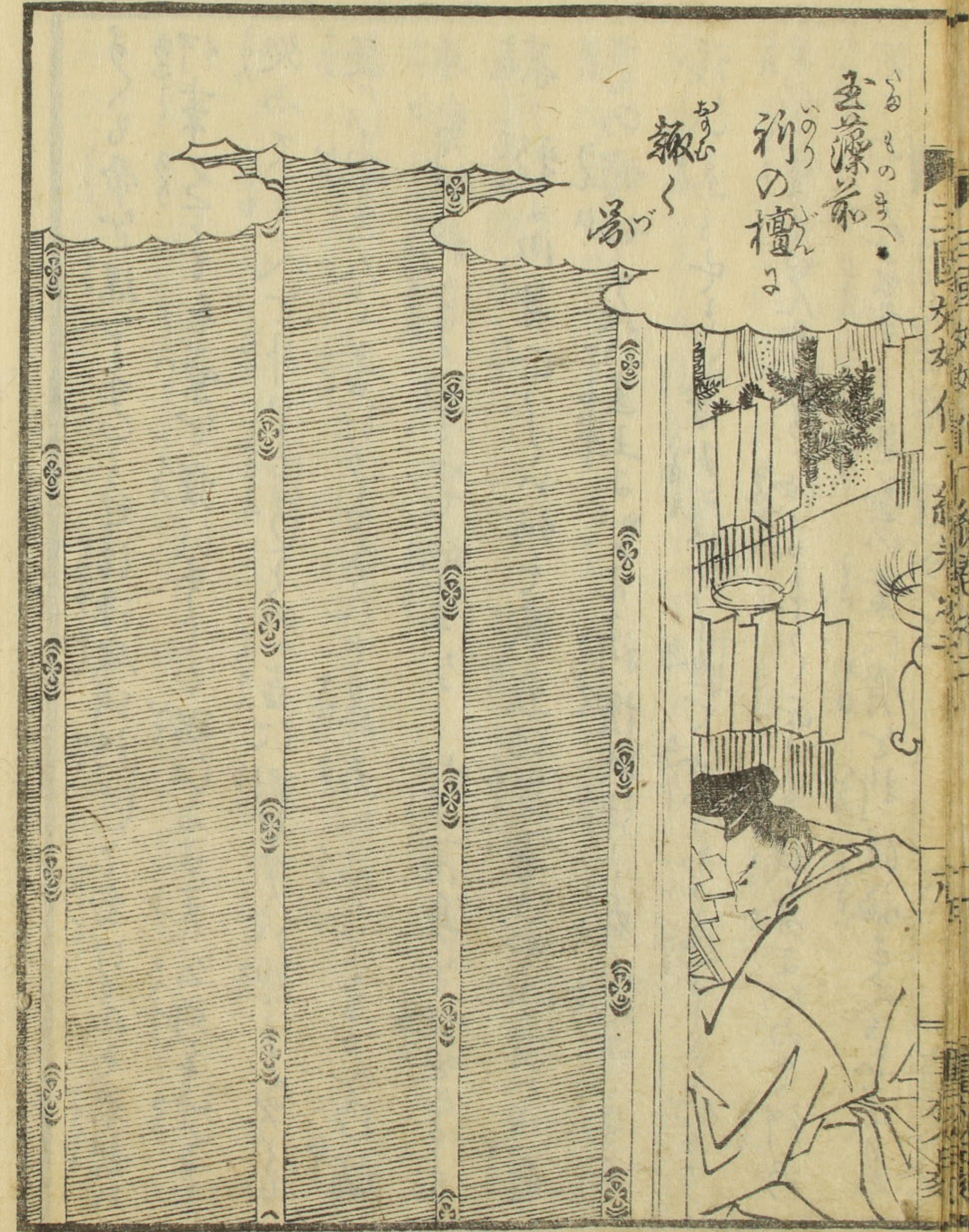


星辰星流星七曜は本曜火曜土曜金曜水曜羅曜計斗の
九曜を空里八方に六十は本の小羅を六十の卦配配東方
に東に幣南方は赤に幣西方は白に幣北方は皂に幣中
央は黄に幣を五段よりあ上は七重の段連なり國常を
尊國校推尊豊斟渚る泥を黄に面足る伊特諾る下に
五重の櫃より多々天照大神也穗耳を瓊杵を産み出
見る鸞鶴草青不合を糸春日八幡より八百の神悉く
勅語あり四方は四大明王東は降三世西は大威徳南は軍
陀利夜叉北方は金剛夜叉に方の隅は天王聖持國天
坤は增長天乾は廣目天艮は多門天巽は明二面盞外は

一車神の大體をて供物を備へ清浄の伽羅をくちて何れ今日
保安元庚子年九月八日新羅の用國安倍泰親衣服法衣
冠帯して櫃小果る多々赤白黒の海衣を着せしその
又人甚色の幣衣を甚黄色の幣衣を著る泰親が後又
派い外は人々をある世櫃の中央は三葉ある幣衣を
着し立並自身列は白き幣を取替目の弓矢た右は右を
新をあげて七日公卿殿上人かりりお信ありて満願の
日はあつて玉藻の前を信備し一葉を白殿下よりつて
奏聞を願ひいけふを其音殿聞は達せしを主上玉藻
の殿をて殿が病平愈の祈りて泰親櫃をりあけ七日の



二六八 大正二年三月一日



玉藻の前
の櫓
の
報
易

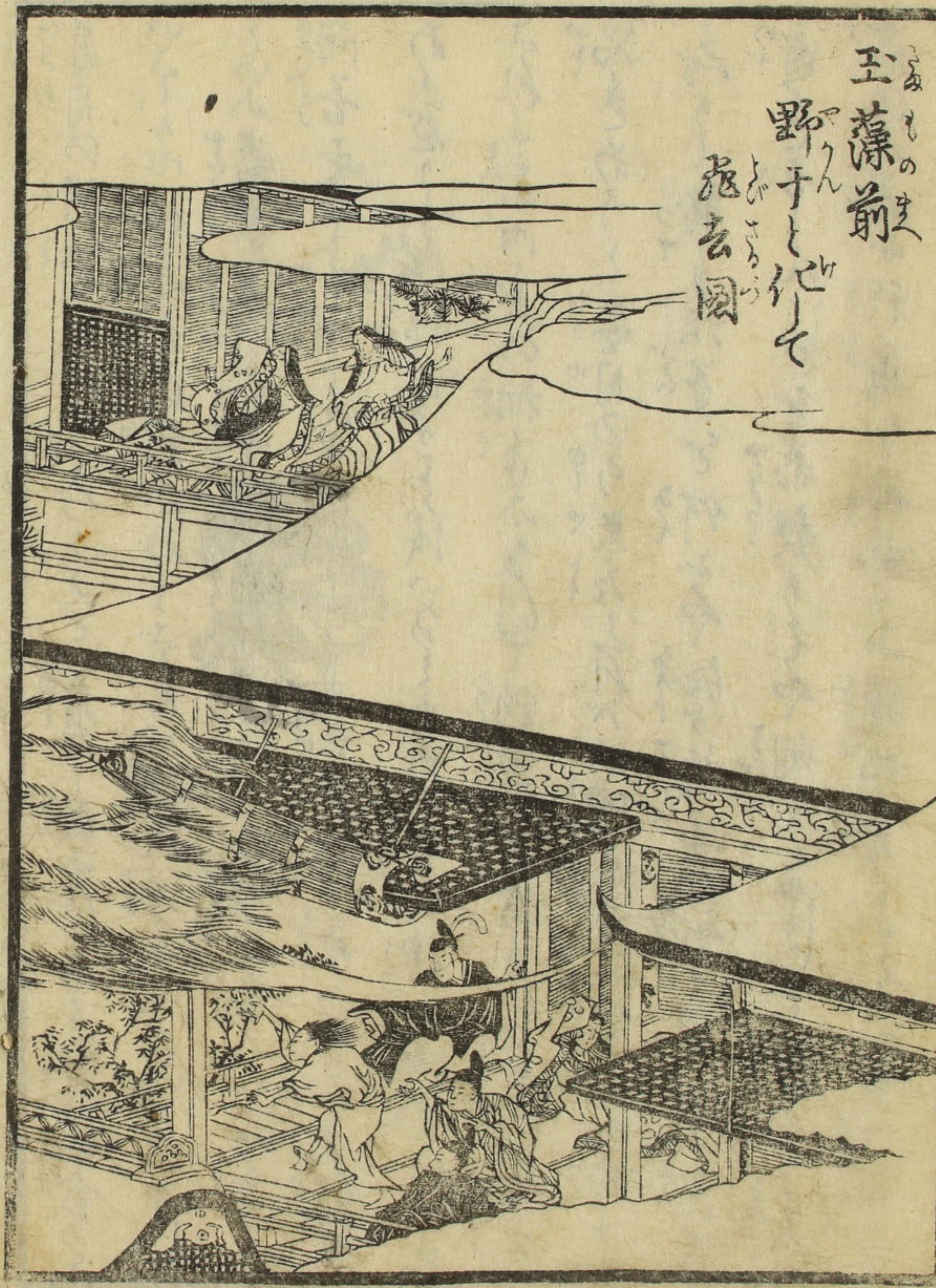
二六八 大正二年三月一日

恥辱をうけぬが家の恥絶て振へよの不便に異見を加へる
なり早く此祈を止はしと怒のていふけりふを恭親又やける
ハ今日満朝の祈も危うく早まざるにやん為奏せし君親
重く蒙るは父帝の由惱を祈の禮を止すと妨らるゝ公といふ
がけきふと由身成呪咀あはれも命をうまひさるに祈らん心
うそ實情も貞妃も秘はし然るをあんや巧言をりて
故障あつんとて誠は素が公と一つハ論じがし君の信ある
ふに業は素家にも命をうまひさるに後悔あり而もなす
け祈を始んや由身の業は素が家恥絶てあつんとて思ふ
ふは免る角も公はまうせけりいふと一つは玉藻の由汝

幕目の修法をりてふうを呪咀教ふとさうの外他金あり
いふと心悩平金の新ふわうさるに禮成彈きさうにたはし
といふ恭親幕目の帝の由病根を除くの祈ひ幾たび由身と
同答するとも同じふ由成がうも云曲らうと斗ふてさる祈を
あはれうに祈するに成いふとありて是又猶も由身にいふ
されは素由身の相もふありて祈のかさありんは君の不忠
をきありと幕目の弓矢なればは時玉藻は赤色を指し
ふうに勝る由身を何ぞや汝が指しは赤くさうさうして
適多さうんと世を恭親りともや祈へるをゆはしと思ひも素
君の由ふ祈を修するふ寵妃さうともあんを一言乃

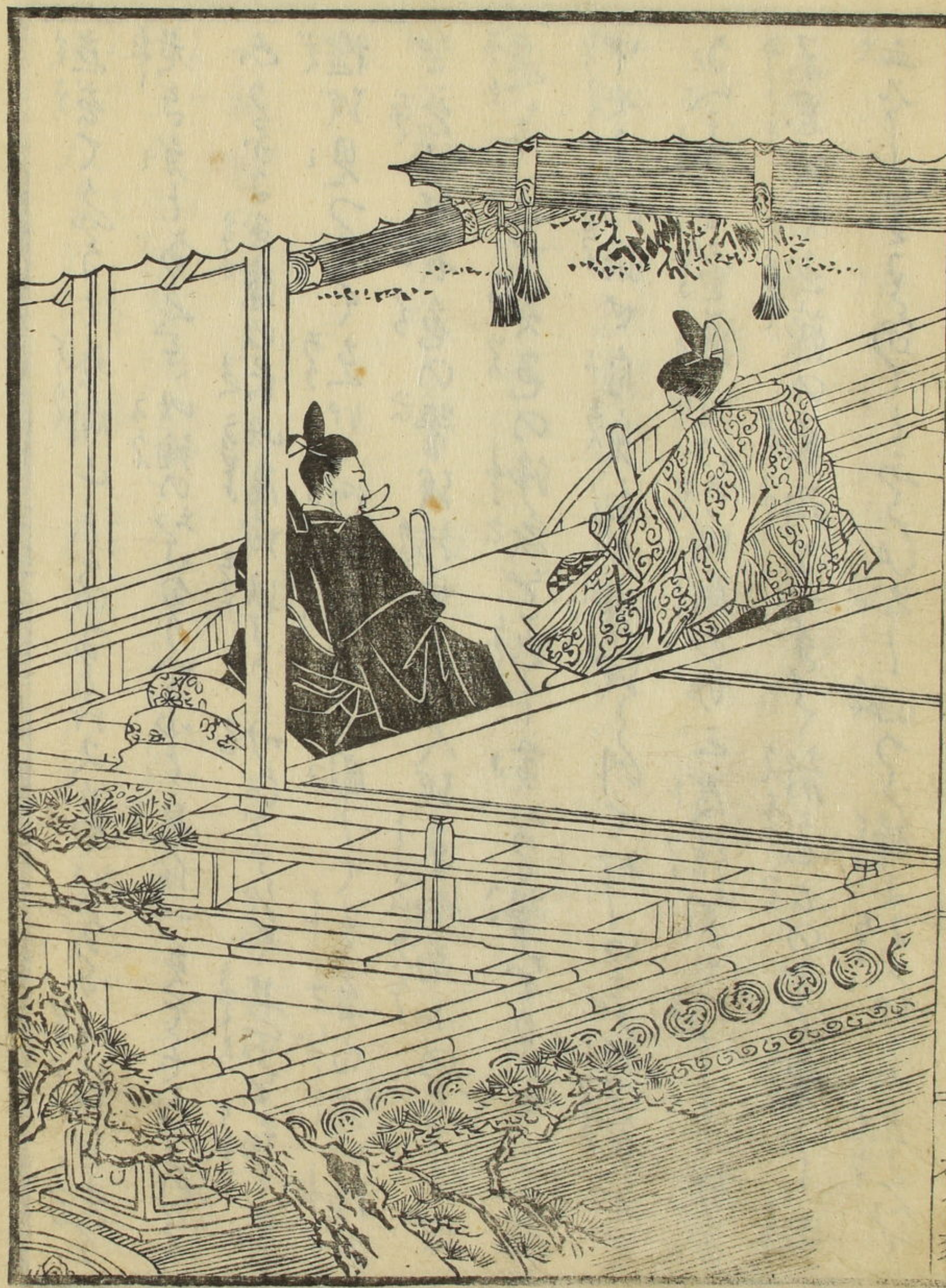


玉藻前
野千とけ
飛玄園





賜
図
賞
親



恭親を白眼一と目と何ふあふ人おとろへる己のあつ
空はひらて一息つまば不思儀あつれ忽ち暴風吹落し来て
晴天俄にわかれ雲空の色ハ墨を流せしとて雲を霞に雨
篠をつも雷電霹靂を應えりして白日まのあつり闇おと
あつるされども檀より敷の燈の赫々と輝きしり今すゞ美し
わろ玉篠の糸目糸は其形變じ金毛九尾白面の狐乃
娑婆わろい一雲々霧うろと一ものうちあて虚を以てのれ
我をあらはるる恭親退けし雲は目あは檀より一は色の
幣紙一集は紙に投付しに赤黒白三色の幣を地は霞を色
の幣を霞より地に投付しに赤黒白三色の幣を地は霞を色

くどめ殿上人を令女官おのつれせりて玉篠の糸を松皮
人おらあつる肝を消し身の毛もよろふ斗ふたれまら空
をまじりとの快晴となれば西陽すゞ申のゆふら及ぶりけり
けり一昂刻開白殿下夢聞わきまを敵聞すししては感斜
あつる主上も大に驚きであふあつるやは情愴是より内平念
あつて龍騎平次のとては健よりありあふを関白殿下と
りて恭親が忠節敵滅せしむる知くと詔令あれば恭
親面目を施し恭親の眉紙ひくき小臣が切しわが加茂
の神速今上の所感他よりあつるは詔令又一関白殿下
ししけりる妖狐がきりし方ハ東國あふるとなるを云ふ



八郎宗重の
家臣青丸
幣と
拾ふ図

に汐を遡てあり——多に幣を東南角九氏房心尾箕の七星
 司る方位をまわりの幣の落る下は概とまり隠る處の意
 概生あるところを災や。害はあらざるあれは其地の諸人悩ま
 ざるんや。東國方へは福ありて幣の力を中して治進を
 度に命令せしむる勢なり——ここに於て其長東國節の至司
 順主へ福流する程不日は素親忠堂氏なり。ありをわかれ
 けり。是れは災をまわりの忠節を信の徳あれば天乃よかあり
 加茂大の神の擁護は多かり。於此をうゝい主上の信福平金を
 うゝ災をうゝ——と前代末國のものがくくは海に。強き神を
 概宗演野の原に近隠るを演八節野干將

抑も於延くや東國節は福流するも幣の端は不日令を九
 尾の要概隠るをわかれは又災あり。子進は治進とてありける
 災は関東下州國宗演野の三千八百貫の成るに宗演八節宗
 演といふ人ありけ。其の福はけいて宗演に命じ。順内を人等
 せけるが宗演の系はまた幣の落るなり。災は出されざる
 此有宗は治進あり。如くその病は神をうゝて解れ
 ざる。幣の端は不日忠節を信の徳あれば天乃よかあり
 て神のうゝ心はけいては後あり。さうもわかれは災あり。治進を
 治し。人数を下る。その山は治あらば八節野干將順主は
 ちひあひ八節野干將思ひくは。災あり。害はあらざる

宗重

那須ゆに

野于將の

國づ



三國女史傳 卷之十一 二十一

